生徒会長
浅羽静香の想い人
狩野景
表紙イラスト：しろすず
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『生徒会長 浅羽静香の想い人』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

狩野景
表紙／しろすず

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

あさばしずか
浅羽静香

成績優秀、スポーツ万能な生徒会長。固い口調で、物事に動じないクールな態度なため生真面目そうに見えるがかなり大胆で、思ったことは行動に移さなくてはいられない性格。

つじさきしゅう
辻先 周

陽気で前向きな性格。男友達相手だと馴れ馴れしい位だが、女の子に対しては奥手で、話しかけられただけで赤面してしまう。

「よかった……。だ、誰もいないみたいだ……」

ある晴れた日の放課後、辻先周は線の細い身体を目立たぬよう丸めながら屋上を見渡すと、ホッと息を吐いた。

柔らかな風が栗色の癖っ毛を揺らす。

眼下に見下ろす校庭では練習を始めた運動部の掛け声が威勢よく響き、どこへ寄り道しようかと相談がてら下校する生徒たちの声がざわめく。

いつもなら周も帰宅部のなかの一人となって、仲のよい級友たちと連んで馬鹿話に花を咲かせていた筈だ。けれども、今日は違っていた。

腕の中に抱え込んだ長方形の紙袋を見詰めて、彼自身にはコンプレックスでしかない可愛らしい童顔を緊張させる。

グビリと生唾を飲み下しながら恐る恐る中身を引っ張り出すと、際どいデザインの水着を着た美少女が、撓わな乳房を両腕の間に挟んで拉げさせ、形のよい尻をクンと迫り上げた、健康的な笑顔と裏腹の扇情的なポーズを取る表紙が現れた。

「ンう……っ！」

エロいといえば確かにエロいが、無修正の画像がネット上に散らばる昨今ではそれほど過激なわけではない。ましてやまだページを捲ってもいないグラビアアイドルの写真集の表紙。その程度だというのに、睫毛の長い小動物を思わせる彼の顔が見る見るうちに真っ

赤に染まった。

事の発端は昼休みだった。

『お前さあ、警戒心抱かせないその顔で結構ウケがいいんだから、いい加減、女の子苦手なの治した方がよくね？　折角向こうから声かけてくれてんのに、顔真っ赤にしてしどろもどろじゃ、いつまでたってもカノジョできないだろ』

『う、うん……。別に女の子きらいなわけじゃないけど、な、なんか、恥ずかしくて、頭の中、真っ白になっちゃって……』

『そんな緊張しなくても、宇宙人と話すわけじゃないんだから……。――よしっ！　それならまずはこれでも見て、女の子の姿に慣れるんだっ‼　会話とかはその後だな』

幼い頃から引っ込み思案であがり症だった。特に女性の前ではやたらと意識してしまい、未だに上手く話せたことが一度もない。その有様を見かねた友人が、昨日発売されたばかりだというグラビア写真集を貸してくれたのだ。

もちろん受け取ったその場で見るなんてできるわけなかった。家でも、もし家族に見つかったらと考えると、落ち着いて見ることなど不可能だろう。

写真集相手でもこのていたらくと、自分でも少し情けない気分になりながら、生徒たちがほとんどいなくなった放課後、ようやく人気のない場所を見つけて純情な少年は気持ちを昂らせた。

「――や、やっぱり、恥ずかしいよ……っ!! これなんか、おっぱいほとんど見えちゃってるしっ! こ、こんな、ちっちゃい水着ッ!!」

教室で友人たちが堂々と見てる時にも、少し離れた所からちらちらと横目で窺っていた。いまも顔から火が出そうなほど火照り、胸はドキドキと鳴り響いているのだが、誰もいないという安心感から、しどけないポーズで笑顔を振りまく健康的な美少女に夢中で見入る。

「でも、可愛いな……この娘ッ! こんな娘がカノジョだったら、楽しいんだろうな……きっと……」

普通に何の動揺もなく話せればと思う。平然とした態度でクラスの女の子とたわいのない話をする友人たちを、いつも羨ましいと思っていた。このままずっと女性とまともに話せないままだと、一生女の子とつきあうことなどできないに違いない。そんな焦りを感じながらも、いまは話しかける必要のない写真の中の動かぬ少女に夢中になる。

荒い吐息に合わせ、股間がむずむずと疼いて強張り始めた時だった。

「ふ～む、キミはこういうタイプが好きなのか? 活発そうなショートカットの小柄なグラマー。――わたしとはまるで正反対だな……」

肩越しに突然、凛と響く声がかけられた。

「――ひぁああっ! は、あ、あぁああぁっ、せ、生徒会長っ!!」

心臓が止まるかというほどに驚いた。

振り向き、声の主が誰なのかを知り気を失いそうになった。
すらりと均整の取れた長身が近寄りがたい威圧感を漂わせる。
意志の強そうな切れ長の瞳に、生真面目そうに硬く口元を結んだ澱み一つない美貌は、心の迷いなどとは無縁のように静寂の無表情を常に湛える。
それでいてクリーム色のジャケットと白いブラウスに包む肢体は、女らしい曲線を描き、エンジのリボンを飾る胸元に椀を伏せたように美しい膨らみが二つ、大きく目立って盛り上がっていた。ただでさえ細身の体型をしているというのに、腰はさらに絞ったみたいに括れ、短めの青チェックのスカートが翻る引き締まった尻を余計に際だたせる。
黒のハイソックスを穿いた長い足の膝小僧に片手をついて、前屈みに少年が開いた本のページを覗き込んでくると、美乳が熟れきった大玉の果実のように、たぷんと揺れて吊り下がる。垂れ落ちてくるロングの黒髪を指先で掻き上げ、写真の水着少女と彼を見比べわずかに顔をしかめる。
「あ、あの、あのっ、こ、これは、違うんですっ！　えとその、本当は家で見ようと思ったんだけど、か、家族が……っ‼　その、あんまり見てません、からっ！　今度から学園に持ってこないように、気をつけますっ‼」
学園始まって以来の才女であり、スポーツも万能な完全無欠と名高い生徒会長。
浅羽静香との思いがけない遭遇に、ただでさえ女性に免疫のない少年の頭の中は真っ白

だった。

噂に聞いた話だが、素行に問題のある上級生の男子生徒六名が、喫煙を見つかり咎められ逆ギレを起こして襲いかかったが、あっという間に投げ飛ばされたという。

学業に関係のない扇情的な写真集を持ち込み、放課後の屋上でこっそり見ていたのだ。どれほど叱られることだろう。

（まさか、先生に報告されたりしてっ⁉　お、親の呼び出しとか……まさか、そ、そこまでされるわけないよね……）

いくらなんでもとは思うが、生真面目で潔癖そうな彼女がどう思っているのか、精巧な仮面のような無表情からはなにも読み取れない。ただなんとなく、眉根を寄せる様が不機嫌そうに見え、周は固唾を飲んだ。実際には友達に押しつけられたものだが、そのことで言い逃れはしたくなかった。拒もうと思えば拒むこともできたのだし、借りることにしたのは自分の意志だ。それになによりも正直いって、かなりの興味があったことは偽れない。

「それを、」

「は、はいっ！」

硬い響きの声が発せられ、思わず背筋がビクンと震える。情けなくしゃがんだままうなだれていると、生徒会長は屈み込んだままで芸術品のように整った手を差し出し、妙に真剣な口調でいった。

「――その写真集、わたしにも見せてくれないか？」
「あ、はいっ！　って……へっ？」
没収するという雰囲気ではなかった。むしろその内容に悪意ではない興味を抱いているかのように感じ、童顔の少年は面食らった。
「む……。だめか？」
呆けて返事を忘れた周に、なんとなく残念そうな様子で小首を傾げる。その仕草に、胸の膨らみがたぷんと揺れて、ドキッと心臓が高鳴った。
「いえっ、だ、だめじゃ、ないですっ！　どうぞっ!!」
我に返り、まるで貢ぎ物を差し出すかのように両手で恭しく渡すと、静香はまるで学術書でも読むかのような面持ちで丁寧にページを捲りながら、水着姿で悩ましげなポーズを次々に披露するアイドルの肢体に食い入った。
「ふ～む、なるほど……こういうのが……。水着も、この布面積が少ない方が……」
なにか真剣な口調でぶつぶつとつぶやきながら、時々周の方をちらりと窺ってため息をついたり、小さく唸ったりする。
（な、なんだろ……。まさかっ、問題のある写真がないかチェックしてるとかっ!?）
一通り見た感じでは、ヘアが見えてしまったりとか危なすぎるものはなかったと思う。それでも、水着を外して手ブラでおっぱいを隠していたりとかは、まずいのかもしれない。

審判を下される時を待つ咎人の気分で身を竦めていると、
「ありがとう。とても参考になったよ」
静香は、裏表紙までじっくり見分したグラビア写真集をあっさりと返してくれた。
「え……？　あ、い、いえ……」
狐につままれた気分で呆然と生徒会長の美貌を眺め、赤面して慌てて目を伏せる。
その周の一挙手一投足を見つめながら、彼女は立ち去る気配もなく少年の前に魅惑の肢体を姿勢よく佇ませていた。
「あ、あの……。生徒会長は、屋上になにかご用なんですか？」
じっと視線を注がれる緊張感に耐えきれず、気力を振り絞って尋ねてみた。隠れてグラビアを見ていた自分を叱りに来たのでないのなら、もう早くこの場から逃げ出したい。
「ああ、用事はそうだな。愛の告白だ」
「そ、そうですか、愛の告白……って、ええっ!!」
あんまりさらっというものだから思わず普通に受け答えしてしまった。
ぶっきらぼうな口調と喜怒哀楽を余り見せない態度に加え、真面目一徹な生徒会長という印象から、なんとなく恋愛ごととは無縁のような気がしていた。
だが本来、学園内でもトップを争うほどの美貌とスタイルの女生徒であるのだから、むしろ浮いた話の一つもない方が不自然だ。

（でも、誰かに告白されるんじゃなくて、生徒会長の方から、なんだ……）

こんな美少女に愛されるなんて、誰なんだろうと興味が湧く。このまま残って確かめたい気持ちに駆られるが、いくらなんでもそんな野暮なことができるわけもない。

「そ、それじゃ、僕、行きますんで。あ……あの……お、想い、伝わるといいですね！」

気恥ずかしくて震える声を振り絞りいうと、邪魔にならないよう急いで立ち去ろうと腰を上げる。

その腕が、はっしと力強く握られ逃さぬとばかりに引き戻された。

「おわっ！　せ、生徒会長ッ⁉」

よろけて倒れそうになる背中を、弾力的な膨らみ二つに受け止められ、腰にしなやかな腕が回される。驚いて振り返るその間近に、理性的な整いを見せる凛とした美貌が迫り、スズランのような甘い髪の香りが鼻孔を擽った。

「キミにいかれては困ってしまう。告白する相手がいなくなるじゃないか」

幻聴かなにかかと思った。彼女がこんなたちの悪い冗談をいうわけがないから、自分の耳がどうかしているのだ。

「は……はいっ⁉　あ、あの、いま、なんて……？」

柔らかく絡みついているくせに、どうにも振りほどくことができないしなやかな腕の抱擁が、宙に浮き上がるほど心地よい。トク、トクと乳房を震わせる鼓動と温かな体温を背

中に感じ、緊張と快感で真っ赤に顔を染めながらきちんと確かめようと耳を澄ます。
「――辻先周クン。わたしはキミのことが好きなのだが」
「――!!　えっ、えぇえぇえぇえぇ――――――ッ！」
聞き間違いでも幻聴でもなかった。
耳元ではっきりと告げられた声は、今度はしっかりと少年に届いていた。愛の告白をするというのに、連絡事項を伝えるかのような飾り気が皆無な言葉。
口調も清々しいほどに落ち着き払っている。
だが返事を求めて抱擁を解いた腕に振り向かされ、向かいあった精緻な美貌は表情こそ生真面目な無表情だが、頬がはっきり分かるほど紅色に染まっている。
（会長……僕の名前知ってるんだ……。いや、そんなことじゃなくてっ！　ぼ、僕のことを……好きッ!?）
冗談をいうタイプには見えないし、人をからかって喜ぶような性格とはむしろ真逆のように思える。
「で、でも、どうして？　会長みたいな人が僕なんかに……。こんな、話したのだって今日が初めてだし」
自分は成績もそこそこ、しかもこうして彼女と相対しているだけでしどろもどろになってしまうほど、女の子に対して免疫のない一男子生徒だ。

くぐもった喘ぎがこぼれた。

真っ白な肌が仄かな桃色に染まる生の房が二つ、床の上でわずかに拉げながら露わとなった。

まだ自力では持ち上げられない膨らみは、両房の間に刻まれた割れ目の奥の悩ましい箇所を確かめられず、思わず覗き込んでしまいたい欲求が湧き上がった。

それは後のお楽しみと自分の本能に言い聞かせ、周は膝立ちになって背後から静香の細い腰に腕を回し、ぐいと抱え上げた。

「はわっ！　さ、さすが、男の子、だな。重くないのか？」

「い、いえ。静香さん、細いから……」

いつも可愛いなどとからかわれている華奢で童顔の少年にとって、なによりも嬉しい言葉で感心してくれて胸が弾んだ。

身長は自分よりほんのわずか高いというのに、生徒会長の身体は驚くほどに軽かった。いま両手で支えている腰などは、実際に触れてみると本当に細く、いっそ片腕の方が抱えやすいのではとさえ思ってしまう。

せめてもの協力と、散々少年に揉まれたたわわな乳房を惜しげもなく押しつぶして上体を突っ伏し、静香が彼の導くままに尻を突き上げてくる。

（――!!　あ、あぁ……これが、女の子の、おま◯こ……）

気っ恥シーン試し読み
ここからスタート!

自分の身体との間が近すぎてほんのわずかだが、彼女の股の間で綻びた花の蕾のように割れて濡れ開いた、桜色の裂け目が窺えた。ひゅくひゅくと間断なく蠢きながら、止めどなく蜜を溢れさせてくる。

「ん、う……後ろから、こんな格好を見られているのは、案外と、恥ずかしい、な……」

視線を感じたのか、静香が悩ましげにつぶやき少年をますます昂らせる。

もじもじと菊皺をひくつかせる鳶色をした肛門の真下、会陰を挟んで小さく開いた潤み穴へと慣れない仕草で狙いを定め、急角度の怒張肉を宛てがう。

——ぬちゅっ！

「ひゅはわぁっ!!」

熱を帯びたぬるぬるの感触に亀頭の先がめり込んだ途端、切羽詰まった喘ぎを上げて静香が全身を震わせた。

「は、あ、当たって、る……。周の、おちんちん、が……。あ、あぁああ、わたしのに、熱いの、はまって……ひぁ……あぁ……」

萎えていた両脚が衝撃に力を取り戻し、少年に持ち上げられた腰を膝立ちで支えていた。鬼頭の先端をほんの少しめり込まされただけで、熱を帯びて伝わってくる脈動に応じて膣口がひゅくひゅくと収縮を繰り返す。

（あぁあっ！　僕の、先っぽっ!!　おま〇こっ、静香さんの、膣、に、触ってっ！　柔ら

かくて、ぬるっとしててっ!!　き、気持ちイイッ！　深くまで、入れちゃったら……ど、どうなるんだっ!?　これぇ！）

初めて味わう心地よさに感動で胸が張り裂けそうだ。

猛り狂う熱極太を、もっと奥へ突き入れることしか考えられない。

「い、挿入ますっ!!　静香さんっ！」

告げるなり彼女の返答も待たず、周は腰を迫り出した。

――ぬっ、ずっ!!　ぬぶっ！　ずぬぬっ……ッ!!

「あひぃんっ!!　つぁ、はぁあぁ……ッ！」

滴が絶え間なく垂れ落ちるほど濡れているというのに、膣穴は相当に狭かった。その上めり込んだ途端に、処女膜が行く手を遮る。

「し、静香、さん……」

呻きを漏らし身を強張らせる彼女を気遣い、挿入を躊躇してしまう。だが、

「だ、いじょ……ぶ、だ、から……は、早くッ、わたしを、キミのっ!!　しゅ、周のものに、してっ！　――ひぐぅううっ!!」

生徒会長が自分から、虚脱の収まった腰を押し込んできた。

――ぬぢぃいっ！

亀頭の先で薄膜が弾ける手応えを感じた。

生徒会長が悲鳴のような呻きを漏らし一瞬身を強張らせるが、すぐに尻を迫り上げてきた。

「し、静香っ！　んぬふぅあぁぁっ!!」

彼女の思いを告げられ、周も込み上げる気持ちのままに、しなやかな背中へ身体ごとのしかかるように男根を一気に深くまで押し入れる。

――ぬぶっ！　ぬずぬずぬずっ!!　にゅじゅじゅじゅずるるずぅうっ！

「ひ、あ、あああぁぁあ、ふはぁあ、はいっ、てっ！　周っ!!　はぁわぁあっ！　お、奥っ、挿入(はい)ってく……はぅぅうううぅぅ――――ンンンッ!!」

締めつけてくる狭襞が容赦なく掻き分けられ、いきり立った極太が根本まで深々と納められる。

――にゅずんっ！

「は、ひぃいんっ!!」

膣奥へと突き上げられ、静香が息を詰まらせ身震いする。

「は……挿入っ……た……。僕の、静香さんの、膣内ぁ……ッ！」

初めて女の子と交わった感動が胸を満たす。

（す……ごい……。襞々が、動いて……絡み、ついてくるっ！　い、挿入(いれ)ただけなの、にっ!!）

疼く肉棒が熱くねっとりとした肉洞にみっちりと包み込まれ、至上の満足感がもたらされる。それなのに貪欲な本能がますます漲って、もっと激しい快楽を欲してしまう。

「あ、あぁ……はぁっ！　こんな、イイ……なんてっ!!　おちんちんっ！　ふぁあ、頭の中、飛んで、しまいそう……ッ!!　しゅ、周……ッ！」

その欲求は静香の中でもどうにもならないほど膨れあがっていた。

突っ伏した上体を乳房が床に擦れるのも構わずくねらせ、尻を一段と押しつけて少年にねだる。

キュンと、ヴァギナが締まり、愛液が溢れかえった。

「し、静香……さんっ！　僕、動きますっ!!」

生真面目に断りを入れながら、少年がストロークを繰り出し始めた。

――ずぼぉっ！　ぬぶっ!!　ぬっぷ、ぬっぷ、ぬぷっ！　ぐじゅっ!!　にぢちぃっ！　すばぁんっ!!　パンッ！　にゅっぶ、ヌブヌブヌブヌブブッ!!

「はひぃっ！　ふぁああっ!!　ふぁうっ！　あ、あぁああっ!!　すご……ッ、すごいっ、こんなぁっ！　あ、あぁああ、中でッ、膣内でぇっ!!　あ、あぁああぁっ！」

激しい突き込みに、滅多に物事に動じない生徒会長がうろたえた。彼女の細腰を両腕でギュッと抱きしめながら、腰を叩きつけるように繰り出す抽送に、艶めかしい肉音が弾けて淫靡な濃厚汁が甘ったるい香りを振りまき飛沫を散らす。

「くふぉおあぁっ！　ぼ、僕も……っ!!　んぁあうぅううっ！　静香さんの、おま○こ、気持ちイイですぅうっ!!　はうっ！　嬉しいッ!!　静香さんとえっちぃ、幸せですからぁあぁっ！」

突然告白された時はただ驚くばかりだった。

からかわれているのではと、信じられない気持ちがほんのさっきまで拭えなかった。

けれどもいまでは、心の内を表すのが下手な彼女が、一生懸命に伝えてくれた気持ちを受け止め、周は至福に満たされながら静香の膣穴を夢中で掻き乱していた。

初めて彼を受け入れたヴァギナは、大量の愛液にまみれているのにいつまでも狭く、荒々しく出入りする極太にみっちりと密着している。

たっぷりの潤滑で擦れあう感触だけでも息が詰まるほどの快感だ。

その上、ペニスがビクンと脈打ったり、蠢き続ける襞がキュンキュンと不意に締まったりすると、それだけで二人ともに頭の中が真っ白になって、身を竦めながらよろめいてしまう。

「ん……ふぁっ！　くぅ……ンンンッ、はぁあっ!!　あうっ、奥ッ!!　いっぱい、叩いてるっ！　あああ、頭、ダメになりそうだっ!!　気持ちよすぎてっ！　わたし、周に、馬鹿な子に、されてしまうっ!!　ひいうっ！　ふあっ!!　ふぅううぅあああっ！」

後ろからのしかかりながら挿入しているため、正常位で交わるより深くまでペニスが埋

まってしまっている。根本まで叩きつける度に、子宮を容赦なく弾かれてもう静香の理性が壊れる寸前だった。

「あぅうっ！　だ、だめですっ‼　そんな、お尻ッ、ふ、振ったらぁあっっ！　締めつけ……すぎだからっ、僕も……もうっ‼」

気持ちよすぎて苦しい筈なのにもっと過剰な刺激を求めて腰をくねらせながら自ら尻を突き上げてくる。淫乱状態の生徒会長に、少年の奥からも狂おしい熱塊が豪快に迫り上がってきた。

「と、止まらないのっ！　し、尻もッ、お股もっ‼　周に、やられてしまって、と、とまらなひぃいっ！　あふっ、はぁあぁっ‼　んひぁあぁぅっ！」

クリーム色のスカートとブレザーも、白いブラウスも飛び散った淫靡な汁と汗でぐちょぐちょに濡れて、豊かな乳房を拉げさせた悩ましい身体を淫靡に飾っていた。

膝立ちで尻を迫り上げ続ける引き締まった両脚が小刻みに震え、うねうねと勃起に絡みつく牝襞が波打つような痙攣に見舞われ始めた。

「ひうっ！　ふぁああっ‼　だ、だめですっ！　そんな、気持ちよすぎる、……されたらぁっ‼　出るッ！　静香さんの、膣内、射精ちゃうからぁあっ‼」

こらえる余裕が全くない。

もうすでに熱濁が尿道にまで込み上げてきている。

口の中と違って、ヴァギナに放ってしまえば、彼女を孕ませることになってしまうかもしれない。
それだけは避けなければならないのに。
腰のストロークを止めることができない。
それどころか、痙攣する膣襞に剛直を揺さぶられる快楽に、ありったけの勢いで牝穴の奥深くをバックから突きまくってしまう。
——ぬじゅぬぶぬびゅぐじゅじゅっ！　ぱんぱんぱんぶばんっ!!　ぬぽっ！　にゅばんっ!!　すぱんっ、すぱんっ、ずっむむぶじゅじゅっ！
「ひあぁあっ！　ひぃ……ふぅううっ!!　ふぁわ……ンンッ！　あ、あぁあっ!!　いい……からっ！　大、丈夫っ!!　出し……出し、てぇええっ！　ふぁああっ!!　わたしの、膣内ッ、周の、いっぱい、欲しいからっ！　く……ふぁあはぁああぁっ！」
嬌声に乱れる言葉を途切れ途切れに紡いで望みを告げると、静香がビクンッ、ビクンッ!!　と弓なりに反らした背中を震わせた。
「はうっ！　だってっ!!　で、でもっ！　そんな、したら……ッ!!」
彼女本人の許しを得てしまい、我慢が一切効かなくなった。
いけないと思いながらも、もうどうすることもできない。
「つぁはぁあうっ!!　でるっ！　出ちゃうッ!!　く……はぅううっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/